

ら、親が元気なうちは心配ない」とされてきたのに、水銀中毒は「母親の健康に重篤な影響を与えなくとも、胎児に重篤な障害をおこす」のである。ユージンおよびアイリン・スミスが写真集で世界に紹介した胎児性水俣病患者は40人もいるが、日本の他にスウェーデン、アメリカそしてイラクにもいる、とされている。

我々の公害研究の作業は、日本の公害のすべてを取り上げたのではない。[宇井純]らが手がけた事例に限定されているが、それだけに具体的であり、かつ詳細である。そして、特徴的なのは、公害の発生源になる企業では、内部に職業病をかかえていることが多いことに注目し、職業病と汚染とが同一の原理で結合されていること、それが広域化されるという公害への発展の図式を示しているところにある<sup>4)</sup>。別の言い方をすれば、工業化による「負の衝撃」に焦点をあてているのである。

#### [注]

- 1) 石牟礼道子「苦海浄土」、1972、講談社。「樺の海の記」、1980、朝日新聞社。同編「天の病む」、1974、葦書房。
- 2) 原田正純「水俣病にまなぶ旅—水俣病の前に水俣病はなかった—」、1985年、日本評論社。
- 3) 東海林吉郎・菅井益郎「通史足尾鉍毒事件」、1877—1984。1984、新曜社。
- 4) 飯島伸子「環境問題と被害者運動」、1984、学友社。

## XVII その 他

これまでに紹介してきたことが我々の作業のすべてではない。「食品(加工)技術」[大塚力、笠間愛史]、「衣料/既成服技術」[中込省三]および「農村活動」[浪江虔]があったし、二つの「地域研究」も企てられていた。それらは、いずれも、予備的・準備的な作業であって、やがて本格的拡充と展開が期待されていた。

しかし、時間と予算の制約がそれを果たさせなかった。言わば、こうした未完結の分野にこそ「開発」とかかわる重要問題があることに我々は気づいていた。すでに「予備的出版物」の型で公表されているこの分野の業績が示すように、学術的にも・政策的にも、興味深い問題を内蔵している主題なのに、協力

者たちの労作を珠玉の断片にとどめてしまったことが残念でならない。

とは言え、我々は、「対話者」たちの関心と要求に合わせようと、まことに食欲にすぎていたのもあった。そのことがスタッフの負担を限界的にまで大きくしていたのであったし、問題がなくなかったにもせよ、我々はベストを尽したし、他ではこうはできなかったであろうという自負をさえもっている。私は勤務先がこのプロジェクトのために、大きな負担を敢えて辞すことなく一種の使命感をもって支援してくれたことを、特に記しておきたいと思う。

このことは、国際機関というものの論理と生理にかかわるのだが、それは我を鼓舞した理念と現実との落差でもあった。私は、しかし、失望しているのではない。ただ、協力者たちに申し訳なく思うばかりである。